

ペルセポネーの掠奪

母の愛と季節

2016年2月23日

冬の寒さもゆるみ、春を感じることも多くなりました。ギリシア神話では、冬は豊穡の女神デーメーテルが娘神ペルセポネーとの別れを悲しんでいる、とされます。

ペルセポネーの掠奪を扱った物語はいくつかありますが、今回は比較的有名と思われる「ホメーロス (風) 讃歌」の中から、讃歌第三番の「デーメーテル讃歌」を見ていきます。

ペルセポネーを見初めたハーデースは、父であるゼウスにペルセポネーを妻に欲しいと頼みます。そして、ゼウスはそのことを許可します。問題は、母親であるデーメーテルには、そのようなことが一言も伝わっていなかった、ということです。もちろん、ペルセポネーもそんなことは知りませんでした。

母親から離れて、ペルセポネーは女友達と花を摘んでいました。咲いていたのは、バラ、クロッカス、スマイル、アヤメ、ヒヤシンス、スイセンなど。咲く季節がバラバラではないかと思われるかもしれませんが、このときはまだ、現在の私たちが感じるような季節はありませんでした。その穏やかな大地が大きく口を開けたと思うと、ハーデースが現れてペルセポネーを連れ去ってしまいます。

娘の叫び声を聞きつけたデーメーテルは、世界中を探し回ります。そして太陽神ヘリオスと出会ったとき、娘をさらったのがハーデースであること、それはゼウスの許可のもとに行われたことを知るのでした。ヘリオスはハーデースはデーメーテルやゼウスの兄弟でもあり、冥界の王でもあるので婿として恥ずかしくない身分であるともいますが、怒りに燃えるデーメーテルの耳には届きませんでした。

老婆に身をやつしたデーメーテルはエレウシスへとたどりついたとき、そこを治めるケレオスの娘たちに乳母として来てくれないか、と請われます。ケレオスには、やっと世継ぎとなる男の子が生まれたばかりでした。デーメーテルは乳母となることを承諾しますが、ある晩、その子を不死としようと見と人間としての肉体を焼いているところを見とがめられてしまいます。

こうしたアクシデントもあって、女神としての姿を現したデーメーテルは、自分の神殿を作るように命じて、その中に引きこもってしまいます。そして。神々との交わりも避け、デーメーテルはいかなる植物も芽を出さないように隠してしまいました。他の神々が、いかにすばらしい贈り物を約束しても、女神の心は閉ざされたままでした。

ついにゼウスの方が折れます。ハーデースにペルセポネーを返すように説得したのです。このときハーデースは、ペルセポネーの口にザクロの実を何粒か押し込みます。冥界の食べ物を口にしたのは、たとえ神であっても、完全に冥界から離れることはできないからです。

ゼウスが母であるレイアーを遣わして、デーメーテルを宥めさせます。それでも、娘が冥界の食べ物を口にしていることを知って、冬の期間は離れ離れにならなくては いけません。それゆえ、冬は植物が枯れ果てる季節となったとのことです。

物語を振り返って

- なぜ、ゼウスはデーメーテルに相談もなしに、ペルセポネーをハーデースに嫁がせることに同意したのでしょうか。
- なぜ、デーメーテルはゼウスの意思に反してまで、神々との交わりを避けて、作物の稔りまで阻害したのでしょうか。
- ご自身が周囲の反対を押し切ってでも強く求めたものはあった(または現在ある)のでしょうか。あるとしたら、それはどんなものなのでしょうか。
- それを完全に得るためには、そのようなリソースが必要だった(または現在必要である)と思われるのでしょうか。

ありがとうございました。神話の世界を身近に感じてもらえますように。

系譜と参考地図

